認定NPO法人アカツキ
〒812-0013
福岡市博多区博多駅東1丁目4-1 中良（なかよし）ビル505号室
Email：info@aka-tsuki.org　Web： http://aka-tsuki.org/

年次報告書 2018

認定NPO法人アカツキ

正会員インタビュー「エンガワの夕げ」はなんだった？

実は、アカツキが法人化する前から存在していた、事務所併設の「コレクティブスペース・エンガワ」。そしてそこで開かれていた「エンガワの夕げ」というイベントですが、アカツキのコンサルティングの事業が広がったこと、そして薬院から博多への移転により事務所のスペースが狭くなったことから、これらに関する企画は、残念ながらほぼ継続が難しくなってしまいました。

しかし、昨今NPO界隈では、目に見える「成果」や、役に立つことの「評価」が必要と強く喧伝されるようになっています。そんな今だからこそ、改めてよくわからない活動であり、アカツキの重要な側面であった「エンガワの夕げ」にもう一度スポットをあてるため、正会員のお二人にお話を伺うことにしました。

金曜日の夜に、お酒ではなく味噌汁を

永田：エンガワの夕げについて、他の誰かに話したことってあった？

梅崎：うーん、話したことはないし、説明ができないですね。行く時は家族に「ごはん作って、食べてくるね」とだけ（笑）。

多原：そうそう、「ごはんを食べる」としか言えないよね。私は、よく台所に立ってましたね。買い物が終わったぐらいに来て、作って、食べて、帰るだけって感じ。

永田：ごはんを食べる時、何話してたっけ？テーマ設定はしてなかったよね。

多原：テーマがあるとか、何かを喋ったり議論しないといけない状況になるのはあまり好きではなかったです。テーマでしゃべるのは職場でやっていたし、それを求めて夕げに行っていなかったから。その場に来ている知り合いの人と他愛のないことをだらだらを話す感じですね。エンガワには、「みんなでお喋りするのが好き」という人は、少なかったと思います。

梅崎：みんなで１つのことを話すことはなかったですね。私は当時、NPOの経験も社会人経験もなくて、全員年上だったかったから、テーマがあっても話せなかったと思います。

多原真美さん　梅崎 友貴さん（共にアカツキ正会員）

永田：実際、話すよりも、台所で調理する役割の方が間が持つし、人気だったな。自分は、社会人の週末の過ごし方に選択肢を増やしたかったというのがあるんだね。お酒が飲めて、元気があって、社交が上手で、お金もある。そんな人の居場所は街にたくさんあるけど、自分も含めてそれがちょっと合わない人はどうしたらいいんだろうって。「社会を変える」は大げさであまり好きじゃないけど、話す内容よりも、そこにある現実の「風景」が変わらないと、意味が無いんじゃないかって。

交流、してもしなくてもいい。
成長、してもしなくてもいい。

梅崎：そういえばエンガワを始めた当初、「参加者に名前・年齢・職業などを聞くかどうか？」みたいな話をしてましたよね。エンガワは、夕げをするだけでなく、コミュニティスペースの位置づけだったから。

永田：そうそう、当時流行り始めてた「コワーキングスペース」から"ワーキング"を抜いたという感じの。でも結局は、属性や肩書きはほとんど聞かないようにしていたと思う。同時に、何かルールとして明確に掲げることもしなかったはず。

多原：夕げ以外でも、エンガワを借りてアクセサリー作りの会や、ただリラックマ好きと集まるだけの会をしてました。エンガワで出会った人と一緒に、別の場所で参加者を呼んで1日カフェをしたこともあります。私がお菓子をつくって、もう1人がそれに合わせたオリジナルの紅茶を提供してくれて。その後、４～５回は続けて開催してました。

梅崎：そのエンガワから派生したカフェにお母さんと一緒に参加しました。それまでは大学生時代から、古いビルにある小さなNPOに通っていたのを、訝しげに思われてたので、誤解が解けた良い機会になったかも（笑）

永田：エンガワで出会ってくれた人同士が何かしてくれるのは嬉しかったよ。ただ、それを「良い事例」と捉えてしまうのも違う。何か新しいことが起きたことを成果として発信するのではなく、人が試されたり、評価されない関係性を保つことが大事だと思っていたから。

代替えが「できる」場所

永田：もしエンガワが無かったら、代わりに行っていただろうと思う場所はある？

多原：友達と居酒屋に飲みには行くとか、カフェでお茶してたと思うけど、別に無いならないで困りもしなかったですね。別に、私は居場所としてエンガワを求めた訳でもなくて、友達に会いに参加してただけという感じ。

永田：エンガワが何かの代わりになることはできるけれども、必須かというとそうでもないということだね。

梅崎：私は、エンガワがなければ、アカツキではインターンをしてなかったし、別の選択肢すら今もなかったかもしれないです。今なら趣味とか、気のおけない友達がいますけど、当時はかなり、精一杯気を張って大学に通ってたので、「話さなくてもいい」とか、「ゆるくて良い」という場がなかったら、途中で折れてたかもなあ。

永田：居場所というよりも「そういうのもアリなんだ」という選択肢の幅を増やした側面はあるのかもね。そもそも、身の回りに足りないから作りたかったけど、困っている人集まれ！みたいな場所にもしたくなくて、バランスはずっと難しかった。

事業拡大すると入り口が狭くなる！？

多原：「エンガワの夕げ」に行くことで、アカツキのことも、職員や他に関わっている人のことも知ることができてたけど、今は少しとっつきにくくなりましたよね。一般の人の入口が無くなったというか、関わろうとしても接点がない。

永田：周年記念パーティー、総会、事業報告会、あとは年一回の大掃除や、年次報告書の作成、イベントの企画を手伝ってもらっているので、機会がないわけじゃないんだけど、有難いことに仕事が忙しくて事務所に居られることも少ないというのもある。守秘義務とかも多い仕事だから、事業そのものに関わってもらうのはなかなか難しいし。

多原：アカツキにとって、そういう接点が無くていいんですか？正会員として、私たち関わらなくてもいいの？と思っちゃいます。

永田：実は、エンガワに代わる「接点」として、ラジオ企画を始める予定なんだよね。

多原：何のために？需要あるんですか？（笑）

永田：ひ、酷い（笑）。まあ、エンガワの夕げも、寄り合いという以外には、何のためにするのかよくわからないものだったので、寧ろそれを引き継ごうかと。理事会でも、アカツキが事業に偏り過ぎず、市民活動の意義を持ち続けるために、多少「余白」的なことをやることが必要と言われてるんだよね。でももし、分かりやすい関わり方がいいとしたら、ボランティアデーとかはどう？

多原：うーん、ボランティアデーと名付けられたら、しなきゃいけないと思ってしまうので何だか微妙。そうじゃなくて、例えば「雪松さんのお手伝い募集！」という日があれば行きたいと思えるので、そういう問いかけだったらいいですね。

梅崎：他のNPOだったら、ボランティアデーと言われた方が参加しやすいけど、アカツキだったらちょっと違和感ありますね。もともと「力になる」ために関わっている訳じゃないので。

永田：確かに。うめちゃん＝梅崎さんには、そこにいるだけでいい、居て欲しいって伝えてたね。なんだろう、それだけで場が緩むというか、今思えば、座敷童子みたいな感じだったのかもしれない！（笑）

2019年度アカツキ役員・職員

代表理事
永田 賢介　認定NPO法人アカツキ 職員

理事
髙柳 希　株式会社ビッグトゥリー 代表取締役
志賀 壮史　NPO法人グリーンシティ福岡 理事
雪松 直子　認定NPO法人アカツキ 職員

監事
兵土 美和子　教育プログラム企画運営
知名 健太郎定信　弁護士／七燈法律事務所

職員
白神 加奈子

アカツキ役員退任にあたって

アカツキ創業メンバー・松島 拓

2019年5月末をもって、理事を任期満了にて退任することになりました。2011年の冬にTwitterで永田と出会い、アカツキへインターンとして参画してから、はや7年が経ちます。まだほとんど仕事がない頃、薬院の前事務所で、永田や髙柳たちと、アカツキはどこへ向かうべきなのか、そのためにどんな事業を行なっていくのか、日々議論を重ねていたことを今でも鮮明に覚えています。

それから7年間、NPOやアカツキを取り巻く環境がずいぶん変わった一方で、私たちが設立当初から大切にしてきた価値観は変わらず軸であり続けています。それは人を何かを達成するための手段にするのではなく、人と人とがゆるやかにつながり、私たちの社会をつくりあげていくというものです。

アカツキそのものもまた、会員や寄付者の皆さまをはじめ、多くの方々に携わっていただくことにより、組織のあり方も進むべき道も生まれてきました。同時に、これまでお会いした多くの方々に教えていただいたことは、いまの私の軸にもなり、これから進むべき道を明らかにしてくれたようにも思います。2013年に大学を卒業しアカツキの職員となった頃、まだまだ先が見えなかったアカツキで働いていくことを、家族にも友人にも心配されました。しかし、いま、あのときの判断は間違いでなかったと、自信をもって言えます。

これまで本当にありがとうございました。そして、アカツキとの関わり方は変わりますが、これからも皆さんと一緒にアカツキをつくりあげていければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

たくみんへのメッセージ
髙柳希　アカツキ理事

たくみん（松島くん）とはアカツキの立ち上げから一緒に歩んできました。当時はまずはお互いを理解することなど議論を重ね、それと並行して事業の立ち上げもするというハードな時代にいました。彼は理事兼職員でもあったので、収入面でも不安を抱えていたと思います。一度だけ、いつもクールな松島くんが苦悩を打ち明けてくれた時、「持ち寄って働く」の一歩が始まった気がします。その後は、経営面から現場まで、なくてはならない存在で、本当に最高のメンバーでした。ありがとう！

2019年1月にうきは市へ
慰安旅行に行きました！

職員能力開発の取り組み

①起業の学校（雪松）

起業の学校とは？
起業の学校は、名古屋市にある「特定非営利活動法人起業支援ネット」が2005年からはじめた“身の丈の起業”を支援する起業支援プログラムです。隔週で開催される通学クラスと、メールでの課題提出をベースにした通信クラス（スクーリング有）があり、2018年度に雪松直子（アカツキ理事・職員）が通信クラスで受講しました。彼女が、起業家精神を持ってアカツキを担っていけるよう、また、アカツキとは違う関係性や先輩・仲間を作っていけるよう選んだ今回の機会。その7カ月間を、起業支援ネット代表理事の久野美奈子さんと、通信クラスの担当の戸上昭司さんの視点で振り返って頂きました。

―雪松の印象は？
久野：初日から「永田さんと対等に話ができるようになりたい」というコメントがあり、雪松直子という一人の人間として立つんだ！という強い気持ちを感じました。
受講生の中でも、とびぬけて質問が多かったですね。
「なぜ久野さんは代表になったんですか？」とか、毎回ドキドキさせられました。

―彼女を色で例えると？
久野：色ではないけど、「クリスタル」。透明感があって硬質な感じ。秘めた強さがあるんだと様々な場面で感じました。
戸上：白でしょうか。他の色に染まっていないというイメージですね。

―起業の学校を通じての変化は？
戸上：起業の学校では、最後に事業計画を作り上げるのですが、その途中で「今までの想いや経験を説明しないと書けない」という相談がありました。これは大事なプロセスだったと思います。結果、事業計画書には、なぜコミュニケーションやチームを大事にしたいかというエピソードが書かれていました。彼女の最大の関心事はずっとその点で、そこはぶれていませんでした。
卒業時に渡す卒業証書には一人一人に向けた言葉を書くのですが、雪松さんには「チームをつくっていくためにも、自分自身を大切に」ということを書きました。悩んだ時、よって立つところは、そこだと思います。
久野：受講中は、順調に悩んでいるなと感じていました（笑）。起業の学校は、受講さえすれば鮮やかに変わるようなプログラムではないけれど、卒業後に、起業のことだけでなく、事業や生活のことも相談してもらえるような関係性になったのは嬉しかったですね。

―今後に向けてのアドバイスをください
戸上：事業の推進に関しては心配ないし、そのために必要な仲間を見つけていく力はあると思います。ただ、その前段階で「ほんとにそれでいいの？」「ほんとにやりたいことはそれ？」と、内省を促すきっかけを与える人が必要かもしれません。
久野：体感や気持ちをベースにしていくことが大事かな。最初に思っていたことと、実際にやってみて気づくことが違うことも多いと思うので、今の自分を基準にするのではなく、小さな実績を積み上げて、そこを超えて感じたことを信じられたら良いですね。

②松原流市民社会論

NPO法制定時の中心人物のお一人である松原明さんをお招きして、丸2日間かけた研修「松原流市民社会論 in Fukuoka -市民社会を脱構築（デコンストラクション）するNPO戦略-」を開催しました。
アカツキ職員の研修を兼ね、完全クローズドの招待制で若干名の受講者と共に歴史・技術・関係性を変えていく学びを得ることができました。具体的活用はまたこれからの課題として、まずは今のアカツキの方向性に確信と希望が持てた時間でもありました。

③職員内部研修

2018年の10月から、2ヶ月に一回のペースで内部職員を対象とした研修を行っています。内容はその時々で変わり「コンサルティングの際にどのようなことを考えているか」「講座の企画設計時のポイント」「認定NPO法人制度の意義」など多岐に渡ります。
教える側・教えられる側に分かれるのではなく、互いの悩みや気になっていることを、質問を通じて解き明かしていく姿勢を大事にしています。大分県日田市でNPO支援の仕事をしている日隈諒さんにも同席頂きました。

事業実施報告

コンサルティング事業

アカツキでは基本的にはなるべくアドバイスや指導はせず、お話を伺って整理する役割と位置付けてコンサルティングを行っています。

寄付集めキャンペーンや中期計画の策定、会計処理のルールづくりのための話し合い等を通じて、クライアントの組織内でメンバーの新しい一面を互いに発見し、異なる意見をオープンにぶつけ合うことができるようになりました。

多様な人が、お金ではない価値でつながる非営利組織だからこそ、ただ「仲良くする」のではなく、むしろ「違いを顕在化させる」ことが、対話や議論のきっかけになる。そして当事者の中からこそ、組織を強くするヒントが生まれてくるのだと考えています。

▶数字で見るアカツキ

2018年度のクライアントは、NPO **9団体**、企業 **1社** でした。

人材育成・コミュニティ構築事業

2018年度は特に県外からの依頼で、ファンドレイジングやNPO法人の事務、行政との協働に関するセミナーに登壇する機会が増加しました。支援組織が講師として一方的に話すのではなく、なるべく現場のNPOの方をお招きしてお話を伺う機会を作り、進行役となることを意識しました。

事務局を担った「NPO法成立20 周年記念フォーラムin九州」では、当時参議院議員として立法の中心となった堂本暁子氏、民間側の中心だった「認定NPO法人シーズ・市民活動を支える制度をつくる会」松原明氏の話の波及効果は大きく、福岡県が貴重な記事資料を作成くださいました。

一方、コレクティブスペース「エンガワ」における対話と交流の場づくりは、事務所の移転等に伴い、開催が難しくなりました。

▶数字で見るアカツキ

2018年度の講座登壇数は、永田が **24回**、雪松が **4回** でした。
（大学での非常勤講師を除く）

調査・研究事業

休眠預金制度に関する全国ネットワーク「現場視点で休眠預金を考える会」の構成団体として、意見書の作成やメディアへの働きかけ等のアドボカシーを行なってきました。休眠預金制度の審議プロセスの不透明性はそのままですが、指定活用団体の案の中に「草の根団体」という文言が入ったことは、大きな成果だと言えます。

このネットワークはその名称とは裏腹に、現場のNPOは少なく、その構成員のほとんどが支援組織でした。業界団体的利権化を防ぐため解散しましたが、今後も「インパクト評価」に関しての監視と提言が必要です。

支援組織が、現場NPOや市民を勝手に代表して発言するのではなく、当事者が声を上げることができる機会づくりを進めていきます。

▶数字で見るアカツキ

意見書の賛同数は、全国で **235件**、福岡県では **15件** でした。

クライアントの声

〔 特例認定NPO法人 山村塾 〕

山村塾は、1994年から福岡県八女市黒木町笠原地区で、都市と農山村の住民が一緒になり、環境にやさしい米づくりや豊かな生態系の森づくりを通じて、山村の環境の保全に取り組んでいます。年間延べ900名の方々が2軒の受入農家のもとに集い、棚田での米づくりや山仕事を行っています。また一年間に計20名以上の国際ボランティアが訪れ、年間120日間の環境保全ボランティア合宿を実施しています。

〔 組織基盤整備 〕

「PanasonicNPOサポートファンド」を活用し山村塾からアカツキに、組織基盤整備コンサルティングをご依頼くださいました。受入農家と活動会員との関係性や役割分担、会議の整理、事業の整理を中心に取り組んでいます。

同じ福岡県内でも事務所からは車で2時間ほどかかりますが、イベントに参加させてもらったり、事務局だけではなく理事の方々とも顔をあわせながら、皆さんの対話や議論が一歩ずつ進むようお手伝いしています。

自分たちで考えないと進まない

▶ 小森 耕太 さん

最初からわかってはいましたが、もう少し、いろいろやってくれるコンサルかと思っていました（苦笑）。しかも、1年目は会議をしていても、まどろっこしく、進んでいるのか？と思うこともたびたびでした。しかし2年目に入ると、理事会や事務局内での発言が増えてくるなど、内部の変化を感じ始めました。楽ではありませんが、やるべきことを一緒に考えてもらうことで、少しずつ前進しているように思います。

足場を固め一歩ずつ

▶ ファン ポウェイ さん

山村塾に勤めて1年経ちました。最初は、お金にもならないこんな会議をするなんて時間がもったいないと思ったりしました。けれども、今では足場を固めて一歩一歩進めていくことが大事だと思っています。また外国人で日本語が流暢でないことを悩んでいた時、「それをキャラとして生かしたらいい」という言葉をかけてもらい「自分らしいことをしたらいいんだ」と勇気づけられもしました。

大きなものから小さなものまで改革が形に

▶ 原 愛子 さん

外部からの異なる視点で整理してもらい、さまざまな業務改善を進めることができました。例えば、時間のかかっていたＳＮＳへのイベント報告を短時間でできるようになったり、週末のイベント運営に関しては、会員さんがスタッフの手伝いに加わる仕組みが整いました。事務局としても心強く、運営側と会員さんのコミュニケーションも増え、一緒にイベントを作っているという雰囲気がより感じられるようになったと思います。

皆の気持ちを汲んで

▶ 小森 文子 さん

アカツキのコンサルでは、話に入る前に進め方などを皆できちんと確認・共有することを大事にしているのだなと感じました。それを、私も普段の事務局会議などで試したりしています。進んだこともまだまだこれからのこともありますが、皆の気持ちを汲んで話してくれているのはとてもありがたいです。自分たちだけでは行き詰まることもあるので、今後も伴走してもらえる機会があるといいですね。

AKBNファンドの取り組み

「立ち止まり対話するための助成金AKBN（アケボノ）ファンド」、2018年度第一期採択団体・NPO法人改革プロジェクトの助成事業が終了しました。30万円の助成金は中期計画策定の理事会や合宿、読書会などに使用されました。

改革プロジェクトのメンバーからは、「スタッフの足並みを揃え、やるべきこととやらなくてよいことが明確になりました。アカツキの寄り添いともに汗水流し、伴走するコンサルの姿勢が良かったです」と報告を受けました。

今回の助成事業の後も依頼をいただき、引き続きアカツキのクライアントとしてお付き合いをさせていただくことになりました。

「ウルトラマン」（一人のヒーロー）から「ゴレンジャー」（チーム）へ！

大阪マラソンのチャリティランナーとしても42.195Km完走しました（リアル伴走支援！）

AKBNファンド第二期2019年度からは、「通常型 ※1 」に加え、「会計特化型 ※2 」の新プログラムを創設しました。税理士の専門家支援もセットとなる会計特化型は、ある個人のご寄付が資金の原資となっています。

これまで様々なNPOに寄付をするなかで、「お金を少しずつあちこちに渡すよりも、1箇所にまとめて、お金以外の支援とセットにする方が有効なのではないか」という考えが湧いてきたとのこと。そのご相談が今回のプログラムにつながりました。

※1 通常型：現金30万円＋30万円相当のアカツキによる伴走型コンサルティング支援を提供
※2 会計特化型：現金10万円＋10万円相当のアカツキによる伴走型コンサルティング
＋5万円相当の税理士による専門家支援を提供

第二期の通常型採択団体は、日本文化を未来につなぎ、また新しい文化を提案するために活動している「NPO法人NPO百千鳥（ももちどり）」に決定しました。

会計特化型の採択団体は「NPO法人バングラデシュと手をつなぐ会」で、バングラデシュでの看護学校設と運営、保険医療などのプロジェクトに取り組んでいます。

助成プログラム改善のための助成金獲得

立ち止まり対話するための助成金「AKBNファンド」の制度改善と地域展開の取り組みが、市民社会創造ファンドが募集する「市民ファンド推進プログラム助成事業」に採択されました。必要とする85万円（1団体上限200万円）で申請し、満額が助成されました。

「管理費のみを助成する取り組みはユニークである」との評価と「NPOの助成調査を踏まえた、助成のあり方の提案に期待している」との言葉を頂きました。2019年9月までしっかりと取り組んでいきます。

支援者（会員）の声

アカツキ設立時からの正会員であり、2018年度からは「AKBN（アケボノ）ファンド」の審査委員も担ってもらっている、宇都さんにお話を伺いました。

▶ 宇都 龍志 さん　会社員・アカツキ正会員

－アカツキと出会ったのはいつですか？

アカツキができるもっと前に、永田さんと出会ったのがきっかけだと思います。その頃、僕は、大学生で大学の課外活動でNPOと関わりができ、NPO法人に就職する人と知り合い、関わり方の１つとして興味を持っていました。そうした中で、主催されていた本の物々交換などの活動を手伝うようになりました。

その後、永田さんが東京にいってインターンをしている様子などを聞いていて、福岡に戻ってきて、アカツキというNPOのマネジメントや内部の仕組みの支援に取り組むNPOをつくるということを聞きました。

－正会員第１号だと聞いてます

それは後で聞いて知りました。アカツキを始めると聞いて、やろうとしていることはわかりましたし、非常に先のことを見据えたことをやろうとしているのだなとは思いましたが、事業としてやっていけるのかなとも思いました。でも、正会員になるのは即決でした。違うかなと思ったら、離れたらいいかなと思って…。

－アカツキの変化を感じますか

団体として落ち着いてきたようですね。以前は、永田さんの団体という印象をうけていましたが、最近ではそうでもなくなったように感じます。今回のようにインタビューを別のスタッフの方がするなど、分担ができているのかなと思います。

－ AKBNファンドの審査員もしていただいてます

審査員の話をいただいた時、僕でいいのかなと思いました。いままで、2回の審査に関わらせてもらいましたが、とても勉強になっています。組織内でのギャップをどう埋めていくのか、コミュニケーションをどうとっていくのかなど、内部の組織運営など、民間でもつながる点があるので、自分の職場でのことを思い浮かべることがあります。

助成に関しては、前回申請して採択されなかったところが、次年度申請しなかった場合、それは、課題がクリアできてださなかったのか、そうではなかったのかなど、助成の回数を重ねていく上で気になることも出てきています。よりいい仕組みができるといいですね。

－今後について

今、大分にいますが、審査会のように早い段階で日程が決まっているものなら参加できるので、そういったものであれば、予定を合わせて、可能な範囲で関わっていきたいですね。

宇都さん、ありがとうございました！アカツキの活動、特にAKBNファンドの助成金原資は、会員の皆様からの会費によって成り立っています。今後とも何卒、ご支援継続のほど、お願い申し上げます。

アカツキの仲間になってくださってありがとうございます

（氏名公開可の方のみ、順不同）

【 フェロー（正会員）】
宇都 龍志 さん　小島 理絵 さん　小渕 亮兵 さん　鈴木 大空 さん　多原 真美 さん　野崎 大雅 さん
池本 桂子 さん　富永 沙和 さん　古橋 範朗 さん　藤見 里紗 さん　大島 隆 さん　稲月 ひかり さん
大庭 勇 さん　原口 尚子 さん　黒田 美穂 さん　仲野 美穂 さん　梅崎 友貴 さん　加藤 健太 さん
大倉 慶子 さん　青木 玲奈 さん

【 サポーター会員 】
青木 絵美 様　岡 優子 様　栗田 将行 様　平 由以子 様　中園 明日香 様　松田 美幸 様　マクリ マイケル 様
原田 君子 様　影山 知明 様　松島 弘哉 様　山田 なな子 様　山中 祥子 様　坂崎 あゆみ 様　増永 弘子 様
相浦 圭太 様　清水 隆哉 様　鶴田 文隆 様　本田 正之 様　宮田 智史 様　渡邊 裕子 様　牛嶋 麻里子 様
福岡 佐知子 様　河合 将生 様　天川 公次 様　鹿野 翔 様　白神 加奈子 様　谷口 竜平 様　金子 雄一郎 様
池本 真一 様　植村 康子 様　高橋 あづさ 様　立花 祐平 様　渡邊 浩美 様　森田 義也 様　今村 晃章 様
福留 裕一 様　梯 愛依子 様　友永 みなみ 様　大久保 大助 様　四宮 淳平 様　鳥居 亜佑美 様　工藤 弥生 様
上村 一隆 様　伊藤 次郎 様　仲西 浩一 様　田北 雅裕 様　加留部 貴行 様　佐藤 貴美 様　兵土 美和子 様
福井 崇郎 様　末本 晴香 様　上角 梓 様　中牟田 政也 様　長廣 百合子 様　岩永 真一 様　牧園 祐也 様
三上 雄 様　三上 美佳子 様　小島 美緒 様　谷口 真菜実 様　執行 沙恵 様　河内山 信一 様　安西 隆之介 様

【 つきつきサポーター 】
野崎 大雅 様　青木 玲奈 様　フィッシュ明子 様

活動計算書

（2018年4月1日～2019年3月31日）

科目			金額(円)	前年度比
経常収益	受取会費	正会員／サポーター会員	393,000	78%
	受取寄付金		275,023	39%
	受取助成金		1,150,000	-
	事業収益	(1)コンサル事業収益	3,955,019	101%
		(2)人材育成事業収益	2,323,934	136%
		(3)調査研究事業収益	15,200	9%
		(4)市民活動助成事業収益	1,862,970	-
	その他収益	受取利息／雑収益	20	9%
	経常収益 計		9,975,166	143%
経常費用	事業費	人件費	3,659,880	136%
		諸謝金	656,880	513%
		会議費	40,611	175%
		支払手数料	8,601	63%
		旅費交通費	1,751,264	235%
		消耗品	38,978	128%
		印刷製本費	19,653	58%
		交際費	173,626	162%
		租税公課	1,382	115%
		賃借料	263,036	211%
		通信運搬費	70,562	261%
		研修費	111,000	553%
		新聞図書費	23,018	201%
		諸会費	40,800	100%
		支払助成金	298,540	-
		事業費 計	7,157,831	179%
	管理費 計		1,622,151	86%
	経常費用 計		8,779,982	149%
	当期経常増減額		1,195,184	107%
	法人税、住民税及び事業税		71,000	100%
	当期正味財産増減額		1,124,184	108%
	前期繰越正味財産額		3,101,883	151%
	次期繰越正味財産額		4,226,067	136%

会費
年次報告の作成と共に、会員更新の依頼も遅くなってしまい、結果的に年度内での収入が例年より少なくなってしまいました。

諸謝金
「NPO法20周年フォーラム」の開催など、助成金や参加費収入から、アカツキを経由して外部に謝金を支払うケースが、一時的に増大しました。

旅費交通費
ありがたいことに、福岡県外からのセミナーやコンサルティングのご依頼が増えてきたため、交通費・出張費が増加しています。

研修費
職員全員がメタファシリテーションの研修に参加、また雪松が「起業の学校」を受講するなど、積極的に人への投資を行なっています。

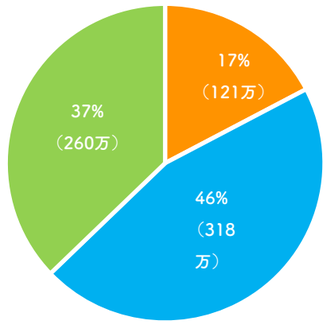
支払助成金
AKBNファンドの助成拠出金です。2018年度はじめての支出となりました。原資は会員の皆様からの会費を活用させて頂いております。

経常費用　計
組織全体にかかる費用（コスト）が前年度比で1.5倍となっています。急激な成長には負荷もかかるので、翌年度は要注意だと考えています。

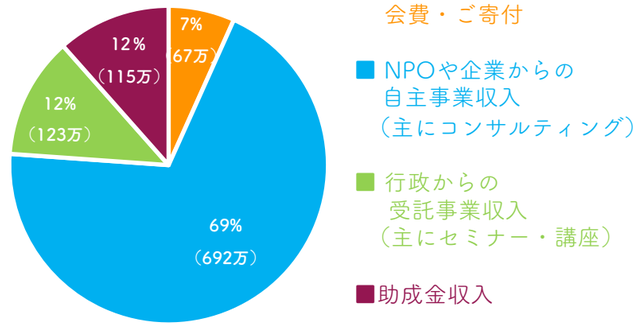
財務分析と今後の方針

昨年度以上に、行政からの委託事業の割合が減り、コンサルティングなど自主事業収入の割合が７割を占めるようになりました。事業規模も、１千万円が目前となり、消費税への対応も検討が必要となりつつあります。一方、認定NPO法人となったことのメリットとして、「みなし寄付」という税控除を活用し、14万円の節税効果がありました。今後、50%近い個人寄付者の税控除や、企業寄付の損金算入PRも積極的に行なっていく必要があります。

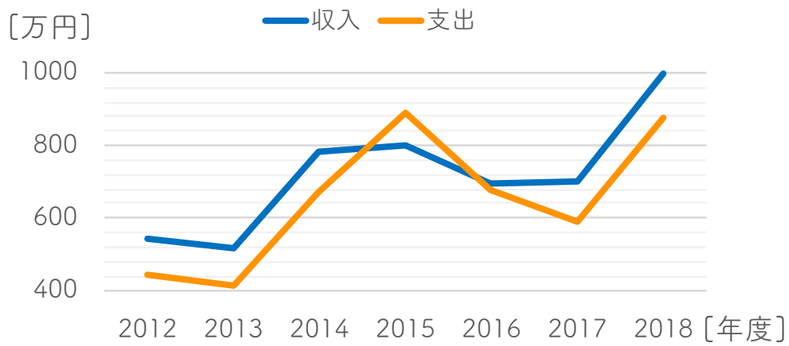
2017年度
収入総額699万円



2018年度
収入総額998万円



アカツキのコンサルティングは丁寧に時間をかける手法のため、収益率は決して高くありません。
だからといって単価を上げたり、企業や行政を主な顧客にしてしまえば、本来ニーズのある、地域の小～中規模のNPOに向き合えなくなってしまいます。支援者の皆様からの会費や寄付が、私たちが大切にしたい価値観やこだわりを担保してくださっています。



貸借対照表

（2019年3月31日時点）

資産の部			負債の部		
科目		金額(円)	科目		金額(円)
流動資産	現金	310,475	流動負債	未払金	343,500
	普通預金	3,661,190		預り金	2,800
	現金・預金 計	3,971,665		未払法人税等	71,000
	未収金	671,544		負債の部 合計	417,380
	売上債権 計	671,544	正味財産の部		
	立替金	238	正味財産	前期繰越正味財産額	3,101,883
	その他流動資産 計	238		当期正味財産増減額	1,124,184
	流動資産 合計	4,643,447		正味財産の部 合計	4,226,067
資産の部 合計		4,643,447	負債・正味財産の部 合計		4,643,447

編集後記

白神 加奈子　アカツキ 職員

アカツキの職員になって、1年が経ちました。とはいえ、なかなかクライアントさんや会員さんと接する機会がなかったので、今回の年次報告書作成にあたり、いろんな方にお話しを聞く機会を持つことができ楽しかったです。
ちなみに、今回から「年次報告書」になったこと、お気づきになりましたか？

小島 理絵 さん　団体職員　アカツキ 正会員

数年ぶりに、遠隔地（東京）からアカツキの年次報告書の制作に携わりました。制作メンバーが変わればその方法も変わります。昔は休みなく働く職員を心配したりもしましたが、今回は作業工程を組む際に「土日はしっかり休む」という前提を明示され、事務局の変化・進化を感じました。
最後は伴走者の私が息切れをしてしまったので、そこはアカツキを見習い、これからも力を添えていきたいです。ありがとうございました。